

◇研究報告

英語カリキュラムを見直すにあたって

調査・研究部主任 情報学部

村山 康雄

本校舎には国際学部と情報学部の二つの学部があり、本研究の最初の目的はそれぞれの学部の専門には関係のない、両学部共通の基礎的なカリキュラムを考察する予定であった。しかしながら、国際学部で2000年度から新カリキュラムが始まったので、最初の目的は不可能となった。今回は今後の情報学部のカリキュラム改定に向けた議論の参考になればと、これまで調査した他大学の例を見ながら、カリキュラム作成上考慮すべきであると思われることを指摘し、それぞれの利点および欠点と思われるもの、およびそれを是正する方法を簡単に述べる。また、治療教育に関して、関西国際大学の取り組みを紹介したい。最後に情報学部の英語カリキュラム改定に向けた私見を述べる。

1. 現在の情報学部の英語カリキュラムの説明

2. 今後のカリキュラムを考える際考慮すべきこと、およびそれぞれの利点、欠点

1) 必修／選択

授業の方法

- 2) 週1回授業／週2回授業
- 3) 統一教科書、統一試験
- 4) 習熟度別クラス編成
- 5) 科目(内容)を自由に選べるか

授業の内容

- 6) 専門に関連するカリキュラム
- 7) 資格英語 (TOEIC、英語検定等)
- 8) 機器 (LL、CALL、コンピュータ等)の使用

3. 補習講座、治療教育 (関西国際大学)

1. 現行の情報学部のカリキュラムの説明

区分	科目名	単位	開講セメスター				備考	卒業 要件 単位
			1年次		2年次			
			1セメ	2セメ	3セメ	4セメ		
必修	英語 I	2	○				講読 講読	6
	英語 II	2		○				
	英語 A (聴解)	2	○	○				
選択 必修	英語 B (入門講読)	2			○		6種類の中から 1つを選択する	2
	英語 C (総合英語)	2				○		
	英語 D (上級講読)	2				○		
	英語 E (上級聴解)	2				○		
	英語 F (ライティング)	2				○		
	英語 G (スピーキング)	2				○		
日本語 科目	日本語 A	2	○				外国人留学生お よび帰国子女入 学者のみ履修で きる	(8)
	日本語 B	2	○					
	日本語 C	2		○				
	日本語 D	2			○			

1年生英語については、

- (1) 「英語Ⅱ」は「英語Ⅰ」が修得できなければ履修できない。
- (2) 「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」は習熟度別クラス編成である。（「英語Ⅰ」と「英語Ⅱ」では学生はほとんどクラスは替わることはない。）
- (3) 「英語A」は学籍番号順にクラス編成を行う。

2年生の英語については、

- (1) 1年生の「英語Ⅱ」の成績に基づき、「英語B」を履修するか、それ以外（「英語C～G」）の中からどれか1科目を選択することとなる。

英語の4技能の、「読む」に「英語Ⅰ、Ⅱ」、「英語B」、「英語D」が、「書く」に「英語F」、「聞く」に「英語A」、「英語E」、「話す」に「英語G」が、おおよそ対応している。なお、「英語C」は英語の総合的な力をつけることを目標としており、英語検定試験を目標としている。

2. カリキュラムを考える際の考慮すべきこと、およびその利点、欠点

情報学部の今後のカリキュラムを考えるのに、考慮すべきと思われることを挙げ、他大学の例を参照し、それぞれの方法の利点、欠点と思われる点を指摘する。その際、それぞれについて現

行の情報学部のカリキュラムとの比較を行う。もちろん考慮すべき事からは互いに関連するが、論点を明確にするため別に扱う。

2.1 必修／選択

1991年の大学設置基準の大綱化により、従来の一般教育科目、体育科目、語学科目が必修である必要がなくなり、必修の語学科目数を削減したり、あるいはこれまで週1回通年授業で2単位だったところを、4単位にするなど、実質的に語学科目の削減が行われている傾向が見られる。

その中でも芝浦工業大学は語学（関連）科目は全くの選択科目となった。つまり、学生は大学4年間全く語学を学ばなくても卒業することが可能となったわけである。もちろん、学生が語学を学ぶ機会がなくなったというわけではなく、「共通科目」の中に「英語の音声について学ぶ」、「英語で学ぶ異文化問題」等の科目、また「スキル関連科目」の中に「英語速読演習」、「英語ディベート演習」、「英語検定試験実践演習」等の多彩な科目が用意されており、英語を学びたい学生には機会が与えられている。¹

2.1.1（完全）選択授業の利点、欠点

利点：近年大学生の学力が低下していると言われ、特に理科系では補習を行っている所が増えていていると聞く。そのような状況の中で、英語を完全に選択にすれば、勉強する意欲のある学生だけが履修することになり、授業はやりやすくなり、効率のあるものとなるかも知れない。

欠点：情報技術の進歩で、インターネットが急速に普及し、そのために英語が必要であると言われていた時代に、学生がただ英語が嫌いで学びたくないという理由だけで、英語を完全に選択にし学ぶ必要はないと断定してよいものだろうか。社会に出てから困ることにならないだろうか。授業のやり方（内容等）を工夫して学生に関心を持たせ、勉強する動機を持たせることはできないだろうか。

2.1.2 情報学部の現状

1、2年次で週2回授業2単位科目を4科目、計8単位が必修である。

（授業の方法）

2.2 週2回授業／週1回授業

以前は週1回で、通年で授業を行うことが多かったが、近年 Semester 制の導入に伴い、東海大学等週2回の授業を実施する学校も増えてきている。この制度では同一教員が週2回同じクラスを担当するのか、別の教員が担当するのか2通りやり方が考えられる。しかしながら、週2回同じ教員が担当するのが困難なためか、あるいは別の教員が担当すると2人の教員の間の連絡が困難になるためか、従来の週1回授業を行っているところも多くあるようである。

2.2.1 週2回授業の利点、欠点

利点：週2回授業は、語学はドリルのため集中的に学ぶのがよいと言われているので、望ましいことであると思われる。

欠点：週2回授業は2つの授業の日の間隔が狭いと、予習が困難であるかもしれない。また、異なる教員が担当した場合、同じテキストを分担し使用するのか、またその場合教方、教員間の連絡等の問題が出てこよう。

2.2.2 情報学部現状

1、2 年次全科目、週 2 回同じ教員で行っている。

2.3 統一教科書、統一試験

多くの大学では、授業で使用する教科書は、クラスの担当教員が自由に選ぶのが現状のようである。

しかしながら、いくつかの大学では全クラス同一の教科書を使用している所もあるようである。大正大学では習熟度により、学生を 3 つのレベルに分けているが、それぞれのレベル内で、統一教科書を使用している。また、東海大学のようにいくつかの指定された教科書の中から、教員が選ぶという大学もある。

さらに期末の試験についても統一試験を実施しているところがあるようである。前述の大正大学ではそれぞれのレベル内で、統一試験を行っている。東海大学では、担当教員が試験を独自に行っている。

2.3.1 統一教科書、統一試験の利点、欠点

利点：統一教科書の使用はクラスによる授業のレベル（難易度）が同じであるという点で、学生にとっては統一試験と共に、特に成績の観点から公平なように思われるかもしれない。教員が自由に選ぶと、クラスによって非常にむずかしい教科書を使うとか、その教員個人の趣味にあったものを使うとか言われることがある。授業内容の均一化という点では優れているのかも知れない。

また、これと連動すると思われる統一試験も、成績評価の観点からは学生は公平感を感じると思われる。

欠点：統一教科書を、例えば異なる学部、学科を横断して使用する場合、専攻により関心が異なるだろうから、学生の勉強の動機づけになるかどうかという懸念がある。

単純に学籍番号順にクラス分けを行った場合には、習熟度の異なる学生が同じクラスに混在し、授業がやさし過ぎて退屈に思う学生、逆にむずかし過ぎて授業が理解できない学生も出てこよう。

また、実際の授業において教師はどうしても担当クラスの成績（上昇）のことを考え、試験のための授業になる恐れもあるのではないだろうか。誰が試験問題を作成するのか、またどのような種類の問題を出すのか等、教員間の綿密な打ち合わせが必要となる。

評価の際には当然試験の結果も大切であるが、日常の学習態度も考慮すべきであろう。一例として、大正大学では、評価の際、統一試験の結果が何割、教員の裁量で与えることができる部分が何割としているとのことである。

2.3.2 情報学部現状

統一教科書の使用、統一試験、両方とも行っていない。次の 2.4 でふれる習熟度別クラス編成を始めた時、習熟度ごとにいくつかの教科書を提示し、その中から選ぶか、同程度のものを選ぶように試みたことがあった。

2.4 習熟度別クラス編成

近年言われている大学生の学力の低下、さらに入学経路の多様化による入試で学力試験を経験

しない学生の増加に伴い、英語が得意でない学生も多くなりつつある。また、一方では将来の就職活動に備えTOEIC等の資格試験を目指して勉強している（英語が得意な）学生もいる。このような状況では、学生の習熟度や意欲を無視した、学籍番号順にクラス編成をするというようなやり方では、効果的な授業を行うことは困難かと思われる。

それを解決するための手段として習熟度別クラス編成を行っている学校もある。前述の大正大学はクラス分け試験による習熟度により、学生を3つのレベルに分け授業を行っている。

2.4.1 習熟度別クラス編成の利点、欠点

利点：クラスに同程度の能力の学生が集まり、能力に応じた授業が行うことができるので、一部の学生が授業が理解することが困難であるとか、逆にやさし過ぎるという事態は解決できる。

欠点：この制度を採用すると、英語が得意なクラスは問題はないと思われるが、クラス編成のやり方によっては、学生の勉強意欲を非常にそぐ事態が起こりうる。例えばクラス分け試験の成績に従って、一番成績がよいクラスから一番成績が悪いクラスを順に設定した場合、一番成績の悪いクラスの学生はプライドが傷つけられ意欲をなくすこともあるだろう。これ解決するためにはあまり細かいクラス分けはしないで、大正大学のように、初級、中級、上級のような大きな枠のクラス分けが考えられる。

中部大学では英語が苦手な学生用の科目を設け、その科目を履修する資格のある学生を学校で指名する。しかし、指名されても学生がその科目を取る意志がなければ、別の科目を受講してもよい。この制度であれば、科目の選択は学生にまかされるため、プライド、意欲の問題は少しは解決されるのではないだろうか。²

また、クラス分けのために行う試験で計った学力と、授業の内容との関連も考えねばならない。例えば、聞き取りの問題を含まない試験の結果で、聞き取りの力が必要である会話の授業のクラス分けも行うのか等のことも考えねばならない。

また、この制度で特に問題となると思われるのは、成績評価であろう。上級のクラスは当然使用する教科書も、その試験も難しいであろうから、学生に成績に対する不公平感がでるかもしれない。極端な場合には、クラス分け試験でわざと悪い成績を取り、英語が得意でないクラスの授業を受け、やさしい教科書、試験でよい成績を取ろうとするものも出るだろう。

これを解決するにはレベルにより、「優」、「良」、「可」のような評価点の割合を変えるのも一つの方法かもしれない。例えば上級のクラスには「優」を多くするなどである。

もう一つの方法は、大正大学が行っているように、同じ科目でもレベルに応じて、例えば「英語1（初級）、（中級）、（上級）」といったような名称にすれば、学生も納得するように思われる。

2.4.2 情報学部の現状

まず、クラス分けについては、1年生の英語については、4月のクラス分け試験で、各学科ごとに成績の上位の学生から上級クラスを少数作り、残りの学生は学籍番号順にクラスを割り振っている。つまり2つのレベルに分けている。

2年生の英語に関しては、1年生の後期の「英語Ⅱ」の成績で、2つのレベルに分けている。「英語Ⅱ」の成績がよかった学生は2年生後期の「英語C」～「英語G」の中から1科目を履

2.5.1 科目を自由に選べる利点、欠点

利点：学生が英語を勉強する動機づけがなされる。自分が関心があることを扱っている内容であれば勉強する意欲が起こるのであろう。例えば、理科系の学生であれば、やはり時事英語、英会話よりも、科学英語、技術英語のような科目を履修したいと思うのではないだろうか。

欠点：すべてを選択とした場合、どのような科目であれ、英語であるのだから、基礎学力があればよいが、ない場合には内容が自分に関心があるからと言って、理解できるものだろうかという恐れがある。基礎力をつける方が優先されるべきとなるだろう。

一部分を科目指定、残りを自由に選択させるのもこれを解決する手段であろう。

2.5.2 情報学部現状

1年生の英語は講読と聴解に限定している。2年生に関しては、一部の学生のみ科目を選ぶことができる。習熟度別クラス編成のところでも触れたが、英語が得意な学生が「英語C」～「英語G」の中で好きな科目を履修することができる。

2.6 専門に関連する英語のカリキュラム

前述の2.5の「科目を自由に選べるか」のところでもふれたが、専門科目を扱ったあるいは関連した英語科目は勉強の強い動機となると思われる。会津大学のカリキュラムは専門を非常に意識したもので、「Technical Writing」はもとより、「Reading 1, 2」、「Composition 1, 2」等の科目も専門であるコンピュータ・サイエンスの内容を扱っている。

2.6.1 専門に関連する英語のカリキュラムの利点、欠点

2.5 で述べたのと同じことが言えるだろう。

利点：自分の専門科目に関連があるものを勉強できるので、動機づけとなる。

欠点：基礎的な英語力をつける勉強をしないでのよいのか。

2.6.2 情報学部現状

現行のカリキュラムでは専門に直結する英語科目はない。ただ1年生の英語、および2年生の「英語B」に関しては、担当者にできれば各学科の専門に関連がある教科書を使用するように依頼している。

2.7 資格英語 (TOEFL, TOEIC、英語検定等)

東海大学では選択英語として「英語検定2級」、「英語検定準1級」、「英語TOEFL初級、中級」、「英語TOEIC初級、中級」等の科目を開設している。中部大学では「資格英語 A、B」という科目で英語検定のための授業が行われている。

2.7.1 資格英語 (TOEFL, TOEIC、英語検定等) の利点、欠点

利点：英語検定などは社会的に認められた資格であり、資格取得のための科目は、就職に役立つであろうから、勉強の動機となる。

欠点：必修となると、すべての学生が対象になるような資格があるか疑問に思われる。ただし、選択科目として、特定の目的を持っている学生、例えば経済、経営専攻の学生にはTOEICの科目、海外留学希望の学生にはTOEFLの科目などは魅力的であると思われる。また、本来これらの資格試験は自分で学習すべきものではないかという意見もあるかもしれない。

2.7.2 情報学部現状

2年次に「英語C(総合英語)」という科目があり、これは英語検定試験を目標としている。

2.8 機器(LL、CALL、コンピュータ等)の使用

従来からLL(Language Laboratory)が利用されてきたが、近年ではさらにコンピュータの機能が加わったCALL(Computer Assisted Language Learning)を導入するところも増えているようである。また、中部大学では「情報英語A、B」という科目で、コンピュータを用いて、インターネットのWWW(World Wide Web)の検索、電子メール、ニュース・グループを利用することによる英語教育が行われている。

2.8.1 機器(LL、CALL、コンピュータ等)の使用の利点、欠点

利点：特に、コンピュータの利用に関しては、英語が主流であるインターネットが利用できることにより、中部大学で行われているような様々な学習が行える。また、多人数授業が可能であると言われている。

欠点：操作が複雑な機器を使用すると、教員、学生双方とも、機器の操作に時間、精力が取られ、語学の勉強というより、まるで機器の操作が学習の主体となるような恐れがある。また、必要かどうかは別として、学生の授業態度を監視しにくいとも言われている。

2.8.2 情報学部現状

現在のところ、一部の教員がコンピュータを利用しているが、カリキュラムとしてはこれらの機器を前提とした科目はない。

3. 補習講座、治療教育

大学生の学力の低下と共に、入学試験時に受験しなければならない科目が減ったため、特に理科系で大学の授業を受けるための基礎力が不足している学生が増え、高等学校の教員に依頼して、補習教育を行っているところもあると聞く。

ここでは積極的に学生の学習活動を支援している関西国際大学の「学習支援室」を紹介することにする。「学習支援室」は「学生相談室」、「保健室」とともに、「学習支援センター」の一つの組織である。その任務は以下のように記されている。(学習支援センター『利用の手引き』1998-4-1:初版より)

- (1) 大学における勉強の仕方がわからない人への支援。
- (2) 高校までの学力(英・数・国の授業内容)に自信がもてない人への支援。
- (3) 特定の専門科目(例えば簿記・情報・語学など)についていけない人への支援。

この支援室には、10名前後の学部の専任教員(情報処理、英語、経営学担当等)が交代で、および支援室担当職員が、月曜日から金曜日まで待機しており、学習全般、特定の科目について相談したい学生は自由に利用でき、勉強の支援を受けることができる。

自主的に支援室に来る学生とは別に、支援室はアドバイザー(教員)から支援室で指導、助言を受けるようアドバイスされた学生を受け入れる。この大学ではアドバイザー(教員)によるアドバイスの制度があり、特定科目の成績、GPA(Grade Point Average)がおもわしくない場合には、「奨励」、「助言」、「勧告」のアドバイスを行う。

さらに特徴的なのが、ここで「一定期間、継続的にスタッフのアドバイスに基づき学習した成果に対しては」同大学の短期大学部のいくつかの単位を履修したものとし、単位を認定することがあるというものである。学生（大学経営学部学生）がこの単位を修得すると、他大学等で修得した単位として、卒業要件単位と認定される。

この支援室の制度は以下の3つの観点から、非常にすぐれているものと思われる。

- (1) 月曜日から金曜日（12:00～18:50）まで長時間開いていることにより、学生が利用しやすい。
- (2) 大学の制度として、成績がおもわしくない学生に支援室で学習支援を受けることをアドバイスすることにより、学生が落ちこぼれることを未然に防ごうと試みている。
- (3) 支援をうけたことに対して卒業要件となる単位として認定することにより、学生が支援を受けたことに対する努力が報われる。

4. 最後に

英語のカリキュラムを見直すに当たって考慮すべき点をいくつか述べたが、これらを踏まえて、ここで今後の情報学部のカリキュラム改定に向けての私見を述べる。

- (1) 必修／選択：現在情報学部では英語は必修である。この国際化の時代を生きていくには、英語を使用できる能力は当然あった方がよい。この点から現状通り必修科目としておくべきだろう。
- (2) 週2回授業／週1回授業：現行では週2回の授業を行っているが、語学は演習科目であり、集中的に行うのが理想なので、現行のままでよいだろう。
また、週2回の授業の間隔は、現在月曜日と木曜日、および火曜日と金曜日の組み合わせとなっており、それぞれ2回の授業の間に2日間あるので、学生が予習する時間は十分ある。
- (3) 統一教科書、統一試験：現行では統一教科書を使用していないし、またその結果統一試験も行っていない。たしかに、統一教科書の使用、統一試験の実施は学生に公平感をもたらすかも知れないが、どのような内容、どの程度の難易度の教科書を使用するか、また全ての担当教員が同一内容の授業を行うことができるか等の問題を解決しない限り、困難ではないかと思われる。

ただ、教科書に関しては、統一教科書ではないが、(YOHANのThe Ladder Seriesの1000語レベル、2000語レベルのような) 同じ語彙数の複数の本の中から担当教員が選ぶという方法は、均質的な授業を行う助けとなるだろう。

- (4) 習熟度別クラス編成：1年生の英語に関しては、能力別に2つのレベルに分けクラス編成をしている。同じクラスに能力が均一の学生が集まるため学生は自分のレベルの合った授業を受けることができ、これは特に問題がないように思われる。

2年生の英語も2つのグループに分けている。英語が得意でない学生には強制的に「英語B（入門講読）」を履修させ、得意な学生はいくつかの科目の中から選択させている。この制度は能力に応じた授業という観点からは優れていると思われるが、2年生の英語は能力別によるグループ分けを止めて、全ての学生が自分が関心がある科目を選択できる制度にしては、と考える。

その理由は、1年生で英語が苦手なグループだった学生は大部分、2年生でも英語が苦手

なグループに入り、2年間自分が興味を持つ科目が履修できないという事情がある。たしかに能力に応じた授業も必要であろうが、一方のグループの学生は自由に科目を選択できるのに対して、自分達は強制的に1年生と同じ講読の科目を履修しなければいけないというのは、彼らの学習意欲を削ぐ可能性もあると思われるからである。

- (5) 科目の内容：上記と関連して、学生の学習意欲を高めるため、事情が許す限り2年生の英語では選択できる科目数を増やすことが重要であると思われる。まず専門に関連ある科目、例えば広報学科では「時事英語」、経営情報学科では「経済英語」、システム学科では「科学英語」、「コンピュータ英語」のような科目を、また資格を取得したい学生のために「TOEIC英語」のような科目も設ける必要もあろう。
- (6) 機器の使用：情報学部では現在、科目としてLL、CALL、コンピュータを用いるものはない。しかし、将来科目によってはこれらの機器を使用する必要があるだろう。例えば、「コンピュータ英語」にはコンピュータが、「TOEIC英語」にはCALL用機器が役に立つだろう。

また、これらの機器の利用方法として、英語が得意でない学生のための補習、治療教育にも有効であると思われる。これらの学生に教材を与え、自学自習をさせ、それに対して試験を行い、成績評価を行うとか、コンピュータに学生が学習した時間を記憶させそれを成績の一部として勘案する、等のことも将来考えねばならないのかもしれない。

最後に、関西国際大学のアドバイザーによるアドバイスの制度、およびそれを支える学習支援室の制度は、本学でも考えてもよいものではないかと思う。

注：

1. 英語担当教員（単数）の話では、正確な統計はないが、4年間英語を全く履修しない学生は10～15パーセント位ではないかと、いうことである。また、3年次の春休みに就職のための面接に行き、英語を履修、修得していないことを指摘され、4年次で英語を履修する学生もいるとのことである。
 2. 英語担当者（単数）の話では、英語が苦手な学生用の科目（「基礎英語A」、「基礎英語B」）を取る資格がある学生ほとんど全てが、他の科目を取らないで、これらの科目を履修することである。
 3. 東海大学もそうであるが、このような制度を取っている大学は学部、学科ごとに英語のカリキュラムを編成しているのではなく、全学部共通のカリキュラムを編成している大学が多いようである。学部、学科を横断することにより、1学部、1学科単位より学生数が多くなることで、多くのクラスができることになり、様々な種類の科目を開設することが可能となる。
- ただし、時間割作成上からは、学部、学科を横断することにより、それぞれの学部、学科の他の科目との時間の調整という問題が起こるであろう。特に週2回授業ということになれば大きな困難が伴うと思われる。

4. 詳しくは以下の中部大学の語学センターのホームページを参照されたい。

[http://www-clc.hyper.chubu.ac.jp/\(class/class.html\)](http://www-clc.hyper.chubu.ac.jp/(class/class.html))

参考文献等：

この報告は昨年度の「情報・国際両学部の英語教育のあり方（中間報告）」の後編となるものなので、参考文献についてはそちらを参照して欲しい。ここではそれ以外に参照したものを記しておく。

関西国際大学・関西国際大学短期大学部学習支援センター

『利用の手引き』（1998-4-1：初版）

福岡大学

『学生必携』（平成11年度）

中村学園大学

『シラバス』（平成11年度）

会津大学

‘Course Descriptions’ Center for Language Research 1997 Annual Review

芝浦工業大学

『学習の手引き 工学部一部』（2000年度）

本調査は以下の四つの方法で行われたものである。

- (1) 執筆者（村山）が実際に大学を訪問し、英語担当教員から話を聞き、履修に関する資料を参照した。
東海大学、同志社大学、中部大学、聖学院大学、久留米大学、関西国際大学、会津大学、中村学園大学
- (2) 大学を訪問し、教務課職員から話を聞き、履修に関する資料を参照した。
九州大学、福岡大学
- (3) 訪問しなかったが、（直接）英語担当教員から話を聞いた。
大正大学
- (4) 電話および書面により英語担当教員から話を聞き、履修に関する資料を参照した。
芝浦工業大学